

Class practice of junior high school Japanese textbook "Bocchan" : Proposal of "means" to deepen thinking

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-03-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松本, 怜, 杉山, 晃弘, 中村, ともえ メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00027930

中学校国語教科書「坊っちゃん」の授業実践

—思考を深める「手立て」の提案—

松本 怜・杉山 晃弘・中村 ともえ

(静岡大学教育学部附属島田中学校・掛川市立東中学校・静岡大学教育学部)

Class practice of junior high school Japanese textbook "Bocchan"

Proposal of "means" to deepen thinking

Matsumoto Ren Sugiyama Akihiro Nakamura Tomoe

要旨

中学校国語教科書「坊っちゃん」(三省堂)の授業実践を2つ報告する。2つの実践はともに「坊っちゃん」第一章最終場面を取り扱っているが、それぞれ「空欄設定法」と「シナリオ化」という異なる「手立て」を設定している。どちらの「手立て」も、比較項を意図的に用意して、本文の表現の細部に注目させ、生徒の思考を深めることを狙いとする。また、2つの「手立て」について、他の文学的文章での応用可能性と要点を考察している。

キーワード： 空欄 シナリオ 「握手」 「トロッコ」 「走れメロス」

1. はじめに

本稿では、静岡大学教育学部附属島田中学校(以下、島田中学校と称する)の第3学年で行った、生徒の思考を深める「手立て」を用いた「坊っちゃん」の授業実践を2つ報告する。まず、島田中学校国語科の教科研究の概要を説明し、本稿の目的を述べる。

島田中学校国語科の授業は、1つの課題に対して、個人追究、4名のグループで行う小集団追究、全体追究という3つの追究を2時間で行う形式をとっている。そして全国的に課題となっている資質・能力や生徒の実態をもとに、年度ごとに研究テーマを設定し、年に1度公開授業を実施している。

本稿で報告するのは、2016年と2019年に行った公開授業の実践である。2016年は杉山晃弘(元島田中学校教諭、現掛川市立東中学校教諭)が、2019年は松本怜(島田中学校教諭)がそれぞれ三省堂の中学校国語教科書「現代の国語3」(2016年版)に掲載されている「坊っちゃん」の授業実践を行い、共同研究者である中村ともえ(静岡大学教育学部准教授)が助言者として指導助言した。なお、島田中学校は地域貢献を1つの信条として掲げており、近隣の公立中学校が

取り扱う教科書を使用して、参観者の授業改善に役立ててもらっている。

三省堂の中学校国語教科書に掲載されている「坊っちゃん」は、全十一章からなる夏目漱石の作品のうちの第一章のみであり、杉山と松本はいずれも第一章最終場面を重点的に扱った授業実践を行った。

2016年の教科テーマは「習得・活用の学びを通して個の「考える力」を育てる授業づくり～自己の学びの変容を実感させる「読むこと」の指導～」であり、2019年の教科テーマは「実生活に生きて働く国語力の育成～比較・関連づけの学びを通して、思考を再構築し、転換する力を育てる授業づくり～」であった。それぞれ異なる教科テーマではあるが、「坊っちゃん」の同一場面を扱い、手立てを講じて生徒の思考を深めることを狙いとしたという点では一致している。

本稿では、2つの授業実践で試みた生徒の思考を深めるための手立てを報告するとともに、中学校国語教科書に掲載されている他の文学的文章への応用可能性とその際の要点を考察する。この報告と考察は、今後の授業作りにいかせる手立てを提案することを目的とするものである。

2. 「坊っちゃん」の授業実践①―「空欄設定法」を手立てとして

(1) 授業の概要

「坊っちゃん」について、「空欄設定法」の手立てを用いた授業を2時間扱いで行った。

① 単元計画

単元計画は表1の通りであり、本時は第6時～第7時である。

表1 単元計画

時	授業内容
第1時	○「坊っちゃん」を読んで感想を書こう ・初読の感想を書き、語句調べを行う。
第2時	○登場人物の関係性とあらすじを整理しよう ・人物相関図と「俺」の回想メモを作成する。
第3時～第4時	○「俺」と清の関係性を整理しよう ・清が「俺」にしてくれたことを整理し、「俺」にとって清がどんな人物か考える。
第5時	○清になり代わって出立の日に「俺」に手渡す手紙を書こう ・出立の日、清が「俺」に対してどんな思いを抱いていたのかを考えながら手紙を書く。
第6時～第7時	○出立の日の「俺」の様子を表す[]に入る言葉を考えよう ・出立の日、悲しむ清を見て、「俺」がどんな反応をしたか、本文の空欄にあてはまる言葉を、前後のつながりや示されている表現から予想する。 ・語り手が「俺」であることの効果について考えさせ、作品を評価する。
第8時～第9時	○小説の続きを読もう ・ここまでの「俺」の清に対する思いを整理して、小説の続きを読む。 ・なぜ最後の一文には「だから」という接続詞が使われているか考える。 ・作品のテーマについて、自らの問題として捉え、考えたことをまとめる。

② 本時の実施時期：2016年11月

③ 対象生徒：国立大学附属島田中学校3年生40名

④ 授業の目標：本文の空欄にあてはまる言葉を前後のつながりや表現をもとに予想し、「俺」の真意を追究する中で、作者の表現意図を理解し、表現の仕方を評価することができる。

(2) 授業展開と生徒の反応

本単元では、生徒の思考を深めるための手立てとして、「空欄設定法」を採用した。空欄として設定したのは、以下の四角で囲った箇所である。

「車を並べて停車場へ着いて、プラットフォームの上へ出たとき、車へ乗り込んだ俺の顔をじっと見て「もうお別れになるかもしれません。ずいぶんご機嫌よう。」と小さな声で言った。目に涙がいっぱいたまっている。[]

[] 汽車がよつぽど動きだしてから、もうだいじょうぶだろうと思って、窓から首を出して振り向いたら、やっぱり立っていた。なんだか大変小さく見えた。」

空欄には、「俺は泣かなかった。しかしもう少しで泣くところであった。」が入る。本文中に空欄を設けることで、生徒は空欄にあてはまる言葉を前後のつながりや表現をもとに予想しながら読むと考えた。また、「俺」の真意を追究する中で、作者の表現意図を理解し、表現の仕方を評価するようになってほしいと考えた。

本時では初めに、次の【課題Ⅰ】を提示した。

【課題Ⅰ】出立の日、目に涙をためて悲しむ清を見て、「俺」はどんな反応をしたらだろうか。

【課題Ⅰ】に続けて、「俺」は泣いたのか、泣かなかったのかという問いを生徒に投げかけた。対立軸を意図的に用意することによって、別の立場や視点から物事を見ることができると判断したためである。泣いたのか、それとも泣かなかったのかという問いに対しては、40名中「泣いた」が6名、「泣かなかった」が34名と、圧倒的に「泣かなかった」と考える生徒が多かった。これは、これまでの学習を通して生徒たちが「俺」の性格を捉え、清の前では強がって涙は見せないだろうと推測したためだろう。

そこで、「泣かなかった」という立場の中でも、さらに「泣きそうなのをこらえていたのか」、それとも「全く泣く気配はなかったのか」という2つの立場に分けて考えさせ、また、「泣きそう」であった場合、そのことは明示されるか、暗示されるかという点についても考えさせることにした。すると、次のように意見が分かれた。

「泣いた」：2名
「泣きそう」(明示)：14名
「泣きそう」(暗示)：20名
「泣く気配なし」：4名

それぞれの立場から空欄にあてはまる表現として、具体的に次のような意見が出された。

「泣いた」
・清に背を向けたまま、静かに泣いた。

・涙を見られてはいけないと、そそくさと汽車に乗り込んだ。
「泣きそう」(明示) ・そんな清を見て、涙があふれそうになるのを必死にこらえた。(「涙をこらえた」他多数) ・泣き出しそうになるのをなんとかこらえて足早に汽車に乗り込んだ。
「泣きそう」(暗示) ・何も言わず、清に背を向け汽車に乗り込んだ。 ・いかんともしがたい気持ちになって、ただ頷くことしかできなかった。鼻の奥がツンとして、慌てて汽車に乗り込んだ。
「泣く気配なし」 ・何か言おうとしたが結局何も言えず、小さく頷いただけだった。 ・戸惑って、軽く別れを告げた後、逃げるようにして車両の奥へと入った。

個人の考えを持ち寄って小集団で議論した後、全体での追究の場面では、次のような生徒の考えが根拠とともに発表された。

「泣いた」 ・無償の愛を与えてくれた清は、実の父母以上に大切な存在だと思う。ありのままの感情を出し、泣いたのではないかなと思う。
「泣きそう」(明示) ・清には心配をかけたくないから、涙を必死にこらえる姿になるのではないかな。
「泣きそう」(暗示) ・「俺」の性格を考えると、涙をこらえると思うから、「清の顔を見なかった」と行動によって表すのではないかな。
「泣く気配なし」 ・寂しいのは間違いないが、「俺」らしく「やっぱりやめようかと思った」と気持ちを淡白に表すのではないかな。

全体追究では、「不器用で、自らの感情を素直に表現してこなかった「俺」だから、きっとこの場面でも本心を隠すに違いない」という考えから、泣きそう(暗示)という立場で発言する生徒が多かった。

そのため、「俺は泣かなかった。しかしもう少しで泣くところであつた。」という本文を提示したときは皆驚いた様子であつた。しかし、そこからさらに議論

していくと、「確かに「俺」はそんなに気の利いた表現は使わないかもしれない」、「本文では、行動(状態)は明示しているが、本当の気持ちはやはり暗示しているといえる」、「結局この表現が一番「坊っちゃん」らしい」などの発言が目立つようになった。

本時の後半では、次の【課題Ⅱ】を提示した。

【課題Ⅱ】「もうだいじょうぶだろう」とは、「俺」のどんな思いを表しているだろうか。「やっぱり立っていた」とあるが、なぜ「やっぱり」なのだろうか。

まず、授業者が「もうだいじょうぶだろう」と「立っていた」の間に矛盾があることを指摘した。そして、逆接になっていないのはなぜかを考えさせるために、「やっぱり」を「しかし」にした場合、どのような印象の違いがあるかを考えるように促した。「坊っちゃん」は一人称で書かれているため、接続詞も「俺」の中の理屈にあわせて使われている。生徒たちの中には、「清の悲しむ姿は見たくない思いながらも、愛を注ぎ続けてくれる清が「そこにいるはずだ」という確信をもっている」という考えを発信する者も出た。

授業のまとめでは、次のような意見が見られた。

- ・私は泣かなかったことが暗示されるのではないかと考えていたが、本当の文を知っても、スッと「坊っちゃんらしい」と感じられる表現だった。語り手が「俺」であるからこそ、ストレートであるのに感情を何か隠したような表現ができるのだと思う。たぶん何年かして清ともう会えないような状態にある「俺」だから、清の大切さを比較し、こういった表現になったのではないだろうか。
- ・今回の追究では、「もうだいじょうぶだろう」と「やっぱり立っていた」という2文に注目した。この矛盾に、坊っちゃんの気持ちの葛藤があつたのだろうと思う。思った以上に空欄の中の言葉はあっさりしていた。多くの人が、まだ「別れを自覚していない」と言っていたが、ぼくは一文目の「俺は泣かなかった」というところが最も感情が高まったところだと思う。泣きそうなところを「泣かなかった」というのは勇気がある。そこがやはり坊っちゃんらしいと強く感じた。

(第7時 追究用紙「授業のまとめ」より。傍線引用者)

空欄に入る言葉を個人追究で考える中で、新たな問いが生まれる。さらに、それによって小集団追究や全体追究では、「泣いたのか、泣かなかったのか」、「泣かなかったとすれば、それは泣くのをこらえていたの

か、そうでないのか」，また，「泣くのをこらえていたとすれば，そのことは明示されるのか，暗示されるのか」といった対立軸ができ，別の立場や視点から物事を見ることができる。このように対立軸が起こる場面の設定を意識すれば，「空欄設定法」は生徒の思考を深めるために有効な手立てになると言えるだろう。

(3) 「空欄設定法」の応用可能性と要点

① 空欄を設定する場面の選定

「空欄設定法」によって生徒の思考を深めるためには，どんな場面の本文中に空欄を設けるのでもよいというわけではない。本文中には，同一の読み取りしか生まれなかったり，根拠が乏しいために想像するしかなかったりする箇所も必ず存在する。(2)で述べたように，「泣いたのか，泣かなかったのか」，「泣かなかったとすれば，それは泣くのをこらえていたのか，そうでないのか」といった対立軸が設定でき，別の立場や視点から物事を見ることができる箇所を意図的に選定することが，生徒の思考を深めるためには重要である。

② 「空欄設定法」実施に至るまでの単元構成の工夫

空欄にあてはまる言葉や表現を考えるにあたって，必ず根拠が必要になる。該当箇所の前後を読んで考えるだけでは浅い読み取りになってしまう。そこで，本実践では，人物相関図や回想メモを書かせることで，登場人物の性格や関係性を深く読み取る機会を事前に設定した。そうした準備を経て「空欄設定法」を実施することで，既習の学びをいかした追究へと深まっていくと考えられる。したがって，「空欄設定法」は生徒の学びが蓄積された，単元の中盤から後半にかけて行うことが肝要であると言える。

これらの要点を考慮した上で，「空欄設定法」の手立てを応用できる文学的文章として，「握手」（三省堂3年）を挙げたい。「握手」は，主人公の「私」とルロイ修道士が，児童養護施設で過ごした思い出を回想するという構成になっている。過去と現在という2つの側面から，「私」のルロイ修道士に対する思いを多面的に読み取ることが可能な作品である。また，語り手は「私」で一人称である。そのため，会話だけではなく，地の文からも「私」の人物像や感情等を読み取ることができる。

「握手」で「空欄設定法」を実施する場合，最後のルロイ修道士の葬式の場面が考えられる。ルロイ修道士は身体中が悪い腫瘍の巣になった状態で，かつての教え子たちのもとを訪れていた。ルロイ修道士の葬式でそのことを聞いたとき，「私」はどのような反応をしたのかという箇所を空欄にして問いたい。具体的には，本文中の以下の四角で囲った箇所を空欄とする。

「私たちに会って回っていた頃のルロイ修道士は，身体中が悪い腫瘍の巣になっていたそうだ。葬式でそのことを聞いたとき，私は□□□□、両手の人さ

し指を交差させ，せわしく打ちつけていた。」

空欄には，「知らぬ間に」が入る。

生徒は，「私」がどういう心情でこの動作をしたのか，本文中の3つの要素を柱に推測していくだろう。

- a 「私」はルロイ修道士に対して，児童養護施設でお世話になった感謝の気持ちを抱いている。
- b 「私」はルロイ修道士と再会した時に，彼の身体の異変に勘づいている。
- c 「私」は最後の別れ際に，自分からルロイ修道士に対して力強い握手を行っている。

主にaから「最後まで教え子を優先した→変わらない愛に対する感謝」，主にbから「最後まで教え子を優先した→自分の命を大切にしておしかったという嘆き・悲しみ」，主にcから「最後まで教え子を優先した→自分もルロイ修道士のように力強く生きていこうという決意」などの対立軸が設定でき，生徒の思考が深まるのではないかと考える。さらに，本文を提示した後，自ら考えた言葉と比較することで，生徒は「私」の心情の表現の仕方についても思考を進められるだろう。

③ 「空欄設定法」を実施する際の配慮事項

教科書に掲載されている文章を用いて「空欄設定法」を実施する際に配慮すべき事項として，以下の2点がある。

第一に，文章の提示方法に関わる配慮である。教科書を用いる場合，当然であるが空欄は設定されておらず，生徒は簡単に正解を知ることができてしまう。そのため，該当箇所を空欄にした本文をプリントで配布する必要がある。プリントを用いるとしても教科書が生徒の手元にあることは変わらないため，先に本文を読んでしまわないように，学習者に注意を促すことも必要である。そのため，授業者は単元の見通しをもった上で授業に臨み，単元の導入部で「空欄設定法」実施の予告を行い，生徒の関心をひくことが肝要である。導入部の授業は，生徒が空欄にどんな言葉が入るのか考えることを楽しみに思うようにさせるためにも重要な意味をもつ。

第二に，学習前に既に文章を読んでしまっている生徒への配慮である。生徒によっては，既に家庭や学習塾等で教科書の該当文章に目を通していている可能性がある。しかし，生徒たちにとって登場人物の言動は強く印象に残っている可能性があるが，②で例示した「知らぬ間に」のような心情に関わる細かい表現は印象に残りにくいと考えられる。「空欄設定法」は，物語の結末を既に知っている学習者にとっても意味をもつ箇所を空欄にすることが大切であり，それが徹底できれば，どのような学習者にも対応は可能だと考える。

生徒が本文を目にすることを完全に防ぐのは難しい。しかし，重要なのは，「空欄設定法」が単なる答え合わせにならないようにすることである。一連の活

動は、それを通して生徒の思考を深めることを狙いとしているのであって、本文の言葉を当てることがゴールではない。本文を正解のように提示して終わりにするのではなく、次の課題を用意しておき、提示した後の展開も工夫する必要がある。

3. 「坊っちゃん」の授業実践②ー「シナリオ化」を手立てとして

(1) 授業の概要

「坊っちゃん」について、「シナリオ化」の手立てを用いた授業を2時間扱いで行った。

① 単元計画

単元計画は表2の通りであり、本時は第3時～第4時である。

表2 単元計画

時	授業内容
第1時	○「坊っちゃん」を読んで感想を書こう ・印象に残った場面について感想を書き、語句調べを行う。
第2時	○登場人物の関係性を整理しよう ・坊っちゃんと清の人物像や関係性を中心に、人物相関図を作成する。
第3時 ～ 第4時	○「坊っちゃん」結末部をシナリオ化しよう ・「走れメロス」のシナリオを参考に、「坊っちゃん」結末部をシナリオに書き直す。 ・完成したシナリオについて意見交換を行う。
第5時 ～ 第6時	○自分のシナリオと本文を比較し、表現の効果を捉え直そう ・完成したシナリオと本文を比較し、本文中に用いられている表現の効果について考える。 ・初読の際にもった表現の効果についての考えが、シナリオに書き直したことでどのように変化したのか内省する。

② 本時の実施時期：2019年11月

③ 対象生徒：国立大学附属島田中学校3年生40名

④ 授業の目標：本文をシナリオ化することを通して、文章の構成や展開、表現の仕方について考えを深めることができる。

(2) 授業展開と生徒の反応

本単元では、生徒の思考を深めるための手立てとして、「シナリオ化」を採用した。本文をシナリオに書き換え、登場人物の心情をどのように表現するか吟味することで、文章の表現の効果を改めて捉え直し、考えを深めることができると考えた。

第3時では初めに、次の【課題Ⅰ】を提示した。

【課題Ⅰ】「走れメロス」を用いて、「シナリオ化」の練習をしよう。

「シナリオ化」という生徒にとって不慣れな活動の難易度を下げるために、既習単元である「走れメロス」（三省堂2年）の冒頭部分で練習する時間を設定した。具体的には、「メロスは激怒した。必ず、かの邪知暴虐の王を除かなければならぬと決意した。」の場面におけるメロスがどのような表情、様子なのかを考えさせた。

個人で考えた後、小集団追究、全体追究の場面では、次のようなシナリオが発表された。

〈シナリオa：静かな怒り〉

メロス：「何てことになってしまったんだ…。必ずその非道な王をこの手で殺してやる！」

（メロスはうつむき、拳を握りしめて怒りに震えている）

〈シナリオb：激しい怒り〉

メロス：「絶対に許せない。今すぐ倒しに行くから待っている！」

（メロスは険しい表情で前を向き、ずんずん王城へ進んでいく）

生徒たちは、シラクスの町人たちから王の非道聞いた際の反応などをもとに改めてメロスの性格を読み取り、シナリオを考えていた。同じ「怒り」という感情でも、上記aのように「静かな怒り」もあれば、bのような「激しい怒り」もあることに気づき、そこから受ける印象の違いについても意見を交わしていた。

次に、教師が作成した同一場面のシナリオを提示した。

〈教師が作成したシナリオ〉

メロス：「よくもシラクスの町を…。善良な人々を…。そんな奴に王の資格はない！今すぐ引きずりおろしてやる！」

（メロスは目を吊り上げ、風を切るような速さで王城へ駆け出した）

教師が作成したシナリオの意図を説明しながら、シナリオにこめた狙いや本文中の根拠を大切にすることを確認して、「坊っちゃん」のシナリオ作りに向けた準備とした。

「坊っちゃん」では初めに、「俺」が四国に教師として赴任する3日前に、清のもとを訪ねる場面をシナリオ化した。具体的には、本文中の以下の箇所を指定した。

「いよいよ約束が決まって、もうたつという三日前に清を訪ねたら、北向きの三畳に風邪をひいて寝ていた。（略）田舎へ行くんだと言ったら、非常に失望し

た様子で、ごま塩のびんの乱れをしきりになでた。あまり気の毒だから「行くことは行くがじき帰る。来年の夏休みにはきつと帰る。」と慰めてやった。(略)

「西の方だよ。」と言うと、「箱根の先ですか手前ですか。」と問う。ずいぶんもてあました。」

この場面を示した際、「ずいぶんもてあました」という表現については必ずシナリオ化するという条件をつけた。シナリオ化する箇所を限定することで、活動の難易度を下げられると考えたためである。また、この表現は、「俺」の清に対する思いの変化が読み取れる箇所だと判断したからである。生徒たちが作成したシナリオでは、「困っている→早くこの場を切り上げたい」ではなく、「困っている→何とか清を安心させたい」というような、「俺」の清に対する愛情が感じられる例が多く見られた。

以上を踏まえ、第4時では「坊っちゃん」第一章最終場面のシナリオ化を行った。その際、意図的に

「俺」の姿や心情を表すように指示を出した。具体的には、本文中の以下の箇所を指定した。

「出立の日には朝から来て、いろいろ世話をやいた。来る途中小間物屋で買ってきた歯磨きとようじと手拭いをズックのかばんに入れてくれた。そんな物はいらないと言ってもなかなか承知しない。車を並べて停車場へ着いて、プラットフォームの上へ出たとき、車へ乗り込んだ俺の顔をじっと見て「もうお別れになるかもしれません。ずいぶんご機嫌よう。」と小さな声で言った。目に涙がいっぱいたまっている。俺は泣かなかった。しかしもう少しで泣くところであった。汽車がよっぽど動きだしてから、もうだいじょうぶだろうと思って、窓から首を出して振り向いたら、やっぱり立っていた。なんだか大変小さく見えた。」

生徒たちはそれまでの言動をもとに「俺」の性格を読み取ったり、「俺」と清との関係性や「俺」の清への思いの変化などを確認したりして、それぞれシナリオを作り上げていった。

完成したシナリオは大きく次の3つに分かれた。

- a 「俺」が清のことを心配している。
- b 「俺」が清と離れることを寂しく思っている。
- c 「俺」が清に対して感謝している。

〈シナリオ a : 「俺」が清のことを心配している〉
(小さくなっていく清を見て、「俺」は痛みをこらえるような顔をする)

俺：「清はあんなに小さかったか…？ 1人残してだいじょうぶだろうか…」

(「俺」は不安気に、いつまでも清を見続ける)

〈シナリオ b : 「俺」が清と離れることを寂しく思っている〉
(「俺」は涙をこらえながら唇をかみしめる)

俺：「寂しくなんかない」

(清が見えなくなっても、「俺」はずっと汽車の窓から顔を出している)

〈シナリオ c : 「俺」が清に対して感謝している〉
(目に涙をため、唇をかみしめて、小さくなっていく清を見続ける)

俺：「ありがとう。ありがとう…」

(涙が一筋「俺」の頬をつたった)

最終場面については、「俺」の姿や心情を表すことに加え、「なんだか大変小さく見えた」の部分を必ずシナリオ化するという条件も設定した。生徒たちは、「なんだか」という部分から、「俺」は自分でも理解しきれていない不安や寂しさを感じていると読み取っていた。また、「小さく見えた」という部分からは、清と別れる「俺」の不安や、清の死の暗示、清に苦勞をかけたことに対する「俺」の謝罪と感謝の思いを読み取っていた。

さらに、本時の後の第5時では、次の【課題Ⅱ】を提示した。これは、完成したシナリオに対する意見交換だけで終わるのではなく、自分たちの作ったシナリオを比較材料にして本文に対する考えを深めるための課題である。

【課題Ⅱ】なぜ最後の場面は「俺」の心情ではなく、清の姿で表現されているのだろうか。

【課題Ⅱ】に加え、「もうだいじょうぶだろう」と「やっぱり立っていた」のつながりに注目し、「やっぱり」が他の表現であつたらどのように印象が変わるかも考えさせた。この表現に「俺」らしさや「俺」の清に対する思いがこめられていることを読み取ってほしいと考えたためである。

全体追究の場面では、次のような生徒の意見が発表された。

- ・清の姿で表現されていることで、それまでの清の「俺」に対する愛情、献身的な言動を思い返すことができると思う。また、「俺」が清に対して他の人とは違う思いをもっていて、清という存在が特別であるということも筆者は表したかったのではないかな。
- ・「やっぱり」は、期待していた通りという意味がある。清の自分への愛を最後まで信じ、実際に感じられた場面だから、ぴったりの表現なのではないかな。その直前の「もうだいじょうぶだろう」には、本当はいてほしいのに素直になれない「俺」の性格が出ていると感じる。「俺」の様子や感情ではなく、清の姿だからこそ、「俺」らしさが伝わると思う。

生徒たちはシナリオ化するために教科書本文を丁寧に読み込む。さらに、シナリオと本文の表現を比べることで、文章の表現に対する考えを深めることができる。このように、目的を明確に設定できれば、「シナリオ化」は生徒の思考を深めるための有効な手立てになると言えるだろう。

(3) 「シナリオ化」の応用可能性と要点

① 「シナリオ化」する場面の選定

「シナリオ化」によって生徒の思考を深めるためには、どんな場面でもよいというわけではない。2

(3)と同様、本文中には、同一の読み取りしか生まれなかったり、根拠が乏しいために想像するしかなかったりする箇所も必ず存在する。そういった場面を選んでも生徒の考えは交わらない。そうならないように、次のような場面を選定する必要がある。

- a その場面から読み取れる登場人物の心情が、「嬉しい」「悲しい」のような異なる意見に分かれる場面。
- b 「寂しい」「悲しい」のような登場人物の微妙な心情の違いが読み取れる場面。
- c 登場人物の心情を表す情景描写がある場面。

このように、登場人物の心情そのものに多様性がある、もしくは心情の描かれ方に多様性がある場面を意図的に選定することが、生徒の思考を深めるためには重要である。

上記の条件にあてはまり、「シナリオ化」の手立てを応用できる作品として、「トロッコ」(三省堂1年)を挙げたい。「トロッコ」には情景描写が多く、そこから登場人物の心情が読み取れる。

「トロッコ」のシナリオを書くとき仮定した場合、良平が26歳になって、雑誌社で働いている姿を描いた最後の場面が候補に挙げられる。具体的には、本文中の以下の箇所である。

「良平は二十六の年、妻子と一緒に東京へ出てきた。今ではある雑誌社の二階に、校正の朱筆を握っている。が、彼はどうかすると、全然なんの理由もないのに、そのときの彼を思い出すことがある。全然なんの理由もないのに?——塵労に疲れた彼の前には今でもやはりそのときのように、薄暗いやぶや坂のある道が、細々と一筋断続している。……………」

ここでは、本来あるはずがない薄暗いやぶや坂のある道が、良平の前に展開される。また、最後は「……………」で締めくくられている。これらの表現が何を意味しているのか、薄暗いやぶや坂のある道をどのように表現するのかを考えることは、良平の現在の心情や、少年時代に味わったトロッコ体験の意味を深く考えるきっかけになるだろう。

② 「シナリオ化」の難易度を下げる準備の実施

「シナリオ化」は、生徒にとっては馴染みが薄い活動である。もとより「シナリオ化」は思考を深めるた

めの手段であって、目的そのものではない。生徒の負担を減らし、活動を効率よく進めるために、次の2つを提案したい。

- a 該当の作品をシナリオ化する前に、既習の教材で「シナリオ化」の練習を行う。

「坊っちゃん」の実践では、既習単元である「走れメロス」の冒頭部分について、もしアニメ化するならどのようなシナリオを書くかと問いかけた。各自簡単なシナリオを作成した後に、教師の作成したシナリオを見て、自分のシナリオを振り返らせた。また、実際に「走れメロス」のアニメを鑑賞してイメージを膨らませた。既に学習した内容を取り上げることによって、シナリオ作成という慣れない課題に対しても意欲的に取り組む姿が見られた。また、教師側からシナリオのモデルを示すことで、自分の考えたシナリオに対する価値づけを行いやすくなり、自信をつけたり、新たな可能性を見出したりすることができ、その後のシナリオ作成に向けた意欲を増す効果も期待できるだろう。

- b シナリオ化する際の条件を指定する。

シナリオは、話の流れの中で考える必要があるため、ある程度大きな場面を扱わざるを得ない。しかし、作品全体をシナリオ化することは、時間的にも生徒の能力的にも難しい。そこで、ある場面を設定した後に、絶対にシナリオ化する表現を再度抽出して提示することが有効だと考えられる。たとえば「坊っちゃん」の最終場面であれば、「なんだか大変小さく見えた」という部分を必ずシナリオ化するという条件を課した。(2)で述べたとおり、「なんだか」という部分から、「俺」が自分でも理解しきれていない不安や寂しさを感じているという意見が出た。「小さく見えた」という部分からは、清と別れる「俺」の不安などを読み取っていた。指定した部分は、シナリオ化するための根拠が盛り込まれている表現である。このように抽出箇所を工夫することは、活動効率を上げるためのみならず、生徒の思考を深めるためにも重要である。その他にも、本文中の台詞部分は書き換えないといった条件をつけることも可能だろう。こうした工夫をすることで、「シナリオ化」への抵抗感を少しでも減らし、生徒の活動を潤滑に進めることができると考える。

4. まとめ

ここまで2つの「坊っちゃん」の授業実践を報告してきた。その中で、生徒の思考を深めるための2つの異なる手立てを提案し、それぞれの手立ての他の文学的文章への応用可能性とその際の要点について考察した。

2016年の杉山の実践、2019年の松本の実践に共通する点を2点挙げ、本稿のまとめとしたい。

第一に、単元の前半部分が同じである。両実践とも第1時に本文を読んで感想を記入し、語句調べを行った。文学的文章の学習は、自分の読み取りがどのように変化したのかを生徒自身に自覚させることが重要である。最初に本文を読んで感じたことを記録しておき、学習を終えた単元の最後に感じたことと比較させることで、生徒たちは自身の読み取りの変化が顕著に自覚できるだろう。

また、両実践とも第2時には人物相関図を作成し、登場人物の性格と関係性を整理した。文学的文章を学習する際には、その教材に適した様々な言語活動が行われる。今回の両実践でも、異なる手立てによる言語活動を行った。生徒の思考を深めるための手立てを有効に機能させるためには、本文の内容の理解が、読みを深めるための土台として事前に作られている必要がある。本文の様々な部分から情報を探し出し、情報と情報をつなぎ合わせて行う人物相関図作成という作業は、本文の内容を理解するためにふさわしい活動だと言える。

単元で設定した手立てが、生徒たちにとって初めて行う活動である場合、慣れない活動に戸惑う生徒も多い。その場合、上記で述べたような準備を単元の前半に行っておくことで、その後の手立てが潤滑に機能し、生徒の思考を深めることにつながると考える。

第二に、手立ての種類は異なるが、手立てを駆使する目的は同じである。杉山の実践で用いた「空欄設定法」も、松本の実践で用いた「シナリオ化」も、本文との比較項を作るという点が共通している。比較項を作る目的は、それによって本文の表現を深く読むことである。本文と自分が作った比較項を照らし合わせ、共通点や相違点について考えることによって、生徒には本文をただ眺めているだけでは浮かばない新たな気づき生まれるはずである。また、空欄にあてはまる表現を考えることも、シナリオ化することも、本文を広く細部に渡って読み込まないと作り出せない。そのため、出来上がった比較項だけでなく、それを作る過程も、生徒の思考を深めるために有効だと言えるだろう。

1つの授業を作る上で、授業者が手立てを用意することは必須である。今回報告した「坊っちゃん」の授業実践では、比較項を作ることで生徒の思考を深める2つの手立てを提案した。授業者が事前準備を適切に行えば、有効に機能するだろう。

同一教材であっても、生徒の思考を深めるための手立ては無数に考えられる。また、1つの教材で用いた手立てが、別の教材でも有効に機能する可能性がある。目の前の教材に対し、生徒の思考を深めるために有効な手立てを探り続けること、また、考えた手立てを他教材に応用する視点を養い続けることが、授業作りに際しては重要だと考える。